
マサイのピンポン

— — —

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マサイのピンポン

【著者名】

マサコ

Z8356C

【作者名】

—

—

【あらすじ】

中村由紀子は、運命に導かれたのか、シベリアンハスキーのマサイと出会う。なんと、家へ連れてきたそのとき、おしつこをするマサイにつられて由紀子も漏らしてしまった。由紀子はマサイの心に影響されていっていることに気付く。お互いの心の中を覗き合える由紀子とマサイの物語。

プロローグ（前書き）

犬の心が見えたなら。

犬は言葉を使いません。

心を覗けたと言つても会話は存在しません。

どうやつたら、お互い理解しあえるか。
理解できれば、いつたいどうなるのか。

プロローグ

細かな格子にガラスがはめ込まれたドアには小さな木の看板がぶら下げる。あつた。

その看板の方には（RUPAN）の文字と、その下に小さく（YM探偵事務所）と書いてある。

この看板を裏返すと（準備中）と書かれているのだが、この小さな喫茶店の名前はこの看板以外どこにも書かれていません。

氣を付けていないとそこに喫茶店があることすら気付かず通り過ぎてしまいそうな、目立たないタバコ屋と隣り合わせの古い店だった。

一人の青年が、そのドアの前に立ち止まると、注意深く辺りを見回しその中へ入っていった。

少し暗めの店内には、通路をはさんで右手にカウンター、左には三つほどのテーブルの席がある。

入ってきた青年をカウンターの中からマスターが、そしていちばん奥の暗がりからは大きなアイリッシュセッターが迎えてくれるのだった。

濃い琥珀色のその犬はマスターの愛犬ホームズだ。

「おや星さん、いらっしゃい」

マスターは親しげに青年へ声をかけた。

青年は星一横須賀警察署刑事課の刑事だった。

星刑事は少し真剣な表情で「中村さんは来ていませんか？」

「ユキちゃんならもうすぐ来ると思うけど、何か用事？」

星刑事は少し迷うそぶりを見せたが、マスターに打ち明けるよう

に「由紀子さんに依頼したいことがあるんですよ」

「依頼って、YM探偵事務所に？」

「はい」

それを聞いたマスターが少し緊張した表情に変わると「我々のルールは分かっているよね」意識して冷たい口調でそう言った。

「もちろんですよ、私も仲間ですから」

そのとき「よっぽど難しい事件みたいだね」いつの間にか隣のタバコ屋の主人、とめ子がルパンの入り口に立っていた。

「とめさん立ち聞きかい」

マスターの声を無視するように、とめ子は星刑事のカウンター席の隣に腰を下ろすと「仲間内で依頼だなんて、ちやんと料金は払つてもらうからね」

そう言うとめ子の前へマスターはだまつて「一ヒーを置くと「星さんはレモンティーだつたよね」

「お願ひします」刑事の割には、この店のマスター やタバコ屋のとめ子には低姿勢だ。

とめ子は、隣のタバコ屋とこの店の大家もしている、かれこれ七十にも手の届こつかと言つ老婆であるが、いたつて血色もよく且付きも鋭い。

壁一枚隣のタバコ屋の奥に一人で住んでいた。

その頃、中村由紀子はシベリアンハスキーのマサイを連れていつも坂道を下っていた。

由紀子が坂の途中にある小さな社の前に来ると、手を含ませてお願い事をした。

『どうかルパンが開いていますように』と、開いていることなど百も承知していながら、そうお願いをしてまた坂を下つていつた。由紀子の傍らのシベリアンハスキー、マサイはリードや鎖もなく、由紀子に寄り添つように歩いている。

坂を下つきつた角の電信柱の根元をマサイは臭いをかいでいる。

由紀子はそんなマサイにお構い無しにそつそつと歩いて行つてしまふが、マサイはこれも由紀子に置いて行かれてても氣にも留めずに臭いをかいでいる。

しばらくすると、臭いの確認に満足したのか、右足を大きく上げ電柱にマーキングをし、由紀子を追いかけた。

由紀子は、その先の最近開店したブティックのショーウィンドウを眺めていた。

少し大人っぽい秋物に由紀子は見とれていた。

その後をマサイが通り過ぎていった。

由紀子は今年十九歳、浪人中だ。

両親には浪人中ルパンという喫茶店でウエイトレスのアルバイトをするということにしてある。

マサイは先にルパンへ到着すると、前足でドアをひっかいだ。

「おや、来たみたいだね」とめ子は立ち上がりとドアを開けマサイを店の中へ入れた「お前のご主人様はどこで道草食つてんかい?」マサイは店内を眺めると、店の中の様子と、星刑事の臭いのイメージを由紀子へ送った。

ショウウインドウに映る物欲しそうな自分に気付くと、由紀子はため息をついてショウウインドウから離れた。

そのとき、マサイからのイメージがユキこの頭の中へ届いた。

『あら珍しい、星さんも来てるのね』次に星刑事の臭いだけのイメージをマサイが送ってきた。ルパンまで三十メートルほど手前である。

その臭いのイメージに由紀子は少し緊張した。

ルパンへ入るなり由紀子は「おはよついざります、星さん私に用事ね、しかもかなり深刻な!」

こう言いながら入つてくる由紀子を他の三人は不思議そうな顔もせずに迎えた。

「ユキちゃんに依頼だつて、自腹切つて」マスターが星刑事のレモンティーを出しながら由紀子へ言つた。

「あら、かわいそぐに、でもこれつて星さんが決めたルールですからね仕方ないわね」

「お願ひします、今回マスターとともに予さんにも協力してもら

うかもしません」

星刑事は緊張した顔で、依頼内容を語りはじめた。

「この事件は、殺人事件に発展する可能性があります、そして当然この依頼内容は極秘です。」

「でも」カウンターの中からマスターが口を挟んだ。「一応確認しておけど、我々の捜査内容は真実だとしても、証拠にはならない場合があるよ、そのところは分かっているとは思うけど」

「もちろんです」そう言つと星はレモンティーを一口すすり、話し始めた。

由紀子とマサイは、互いの意思を通じ合わせることが出来る。

この特殊な関係は由紀子が高校一年生の秋に始まる。

しかし、本当の意味でマサイと由紀子の出会いを語り出すとすれば、それからさうに十一年の月日を遡らなければならない。

それは、由紀子が幼稚園へ入園する年の春だった。

横須賀の海を見晴らせる、物干し台でのおばあちゃんとのひなたぼっこからのこの物語は始まる。

神様の育て方

1 神様の育て方。

「今日ね、一人で坂の下まで行けたんだよ」

「おや、やめ
えらかつたねー」

咲き残るかすかな梅の香りが陽だまりの斜面をのんびりと昇つて
くる。

て
い
る。

見晴らしのよし階の物干し場である。

もうすぐ由紀子は近くの幼稚園へ入園してしまつ。

孫の時間がかかるので、少し新しい

た。

海を一望することができた。

天気のよい日には日向ぼっこをするお婆ちゃんの膝の上でいろいろな話をしてもらつた。

なきや駄目なんだつて」

「本当は、ママが送ってくれるんだけど、ママが忙いときには、もうすぐユキちゃんも幼稚園だものね、はやいねー」「そうだね、」

一人でお迎えのバスまで行くんだよ。

「それじゃあね、お婆ちゃんがいいことを教えてあげよしね」

田元さんへお詫びの言葉を述べた。

「どんなこと？」

由紀子は顔を真上に向け、お婆ちゃんの顔を下から覗き込んだ。

「あのね、神様の育て方」

「かみさまのそだてかた？」

お婆ちゃんは由紀子の目を覗き込むと少しにっこりと笑い、また海のほうへ視線を戻しゆっくと話はじめた。

「坂の途中に小さなお家みたいなのがあつたでしょ」「うん、知ってるよ神様のおうちでしょ、ママが言つてた」

「そうそう、ユキちゃんこれから毎日、あの神様のおうちの前を通るでしょ」「うん」

由紀子の家の坂道の途中には小さな石の祠が祭つてあった。

「その神様のおうちにはね、小さな神様が住んでいるの」

「ちつちやい神様？」

「そう、小さな小さな神様」

「ふーん」

どこかで鶯の芝鳴きが聞こえていた。

「ユキちゃんと同じ子供の神様がね」

お婆ちゃんは由紀子の髪の毛をなでつけながら、ゆっくと話を続けた。

「これからユキちゃんは幼稚園へ行つて、それから小学生になつて、大人になるまで何回もあの神様の前を通るでしょ」「うん」

風はまだ少し冷たかつたけれど、陽だまりの物干し台は暖かな光に包まれていた。

「お出かけのときや、幼稚園に行くとき神様の前を通つたら必ず何かお願い事をしてから坂を下りるのよ」

「お願い事つて、どんな?」

「何でもいいんだけどね、一つだけ大切なきまりがあるの」

「きまりつて?」

「まあ、一つ田は、必ず叶つお願いをかる」と

「必ず叶つお願い?」

「そう、大切なことなの」

遠くで船の汽笛が聞こえていた。

『パパのおふねかな?』由紀子はお婆ちゃんの話を聞きながら、そんなことも思っていた。

由紀子の父親は、海上自衛官である、一年のうち半分以上を船の中で暮らしていく、家へ帰つてくることは少なかつた。

「一つ田はね、必ず叶つお願いをして下りたんだから、帰つてくれるときにはお願ひは叶つてこらでしょ!」

「うん、そうだね」

「だから帰りには、お願ひを叶えてくれたお礼をするの」

「あれ?」

「そうよ、心の中でね、願いが叶いましてありがとハハ!それこましだ。つてね」

「でも、どんなお願ひをすればいいの?だれだれちゃんと会えますよ!」

「うーん、それじゃあその子が休んじやつたらお願ひは叶わないでしょ、だから、みんなに会えますよ!」つてすれば

「あー、そうか」

「大切なことは、必ず叶つお願い」お婆ちゃんは少し力を込めて言った。

「必ず叶つお願い」由紀子は少し難しそうな顔で反復した。「でも、どうしてそんなお願ひをするの?」

「ゴキちゃんはお母さんにほめられると嬉しいでしょ」

「うん、今日も一人で下まで行けたからほめられたよ」

「神様もおなじ、小さな神様だから、簡単なお願いをして叶えてくれたら、お礼を言つと喜んでくださるの」

「ふーん」

「そうすると、神様は少し泣いて育つてきて、いつかは立派な神様

になるかもしないでしょ』

『そうしたら、本当のお願いをしてもいいの?』

『わあね、どうなるかは神様次第だけど、きっと良いくことがあるよ』

高校一年生になった由紀子は、坂を駆け上り祠の前でとまるど足元にカバンを置いて祠に向かい両手を合わせた。

『今日、少し記録が伸びました、ありがとうございました』

心中でお礼を言うと、カバンを拾い上げ、また家までの上り坂を駆け上がつて行った。

由紀子は、高校では陸上部に入り、長距離走を専門に練習していた。

次の大会へむけ、今日はタイムの測定の日だったのだ。
少し難度の高いお願いだつたが、由紀子には自信があった。

あの物干し台からの眺めは、今も変わってはいなかつたが、もうお婆ちゃんはこの世の人ではない。

由紀子がまだ小学生の五年生の冬だった。

お婆ちゃんの最後の入院のとき『早くお婆ちゃんの病気が治りますように』とお願いをしたが、神様は叶えてはくれなかつた。
今まで毎日毎日お婆ちゃんから教わつたとおり、必ず叶うお願いと、そのお礼を繰り返してきたのに。

神様はお婆ちゃんを助けてはくれなかつた。

それからしばらくなはお願いもお礼も止めてしまつたが、そんなある夜、夢の中に死んだお婆ちゃんが現れたのだった。

夢の中のお婆ちゃんは手に大切そうに何かを包み込んでいた。

その手の中には小さなネズミくらいの生き物がピーピーと甲高い声で鳴いているのだ。

夢の中でお婆ちゃんは何も言わなかつたけれど、お婆ちゃんの手中で鳴いているその小さな生き物が由紀子の育てた神様で、由紀子の難しい願いを叶えて上げられなかつたことを悲しんで泣いているので、なぜだか理解できた。

そして高校一年生の今日まで、由紀子は休む事無くお婆ちゃんの教えを守つて来たことになる。

「今頃、神様は子犬くらいにはなつたかな」これが由紀子の今の感想だつた。

いまでは、お願い事を叶えてもらひつねにしているのではなく、生活習慣になつてしまつてゐる。

お願い事を忘れると、一日気持ちが落ち着かないのだ。

そして、由紀子なりにお願いの仕方を工夫するようになつた。

それはお願いの難度をたまに少し上げてみることだつた。

今日の記録更新のお願いも、やや高難度のお願いといつていい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8356c/>

マサイのピンポン

2010年10月21日15時59分発行